



# 教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1995 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町1 2-6 TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

## 教会における女性のあかし

1

(…)以前にも申し上げましたが、女性には「平和の教師」という役割があります。歴史を振り返れば、こうしたすばらしい女性たちの姿がい

2

それは十四世紀スウェーデンの聖女ビルジッタ(1303~1373)です。彼女は当時のヨーロッパで大きな役割を果たしました。統一への動きはあ

が続き、砲火の飛び交う現代のヨーロッパ大陸で、聖ビルジッタのメッセージが時機を得たものであることはおわかりいただけるでしょう。

十四世紀も一触即発で平和と安全が破られかねない状態でした。厳しい利害の対立がしばしば流血の事態を生み、教会内部でも緊張状態が続いていました。

ビルジッタの証言は、こうした時代背景の前にすばらしい輝きを放っています。ヨーロッパの北辺の地で、彼女は平和の使徒となるべき使命を感じ、ローマに赴いて、時の教会と国家権力者に対するキリストの使者となりました。

3

使命を果たすに当たり、彼女は神との深い体験に裏打ちされた、女性としての特質を遺憾なく発揮しました。優しく、しかも確固たる態度で、ビルジッタはまず自分の八人の子供たちに平和と協調を愛することを教えました。彼女の娘カタリナもまた、聖人の誉れを受

## 女性の才能を 社会へ、教会へ

けています。教師としてすぐれた資質に恵まれていたビルジッタは、生まれ育った王族の人々の間で、責任ある地位を得るようになりました。

しかし、彼女の女性としてのすばらしい資質が発揮されたのは、厳律至聖救世主女子修道会を設立して全面的な「観想」生活に入ってからでした。それは現世からの逃亡ではありませ

4

教会はこの並み外れた女性を通して神に感謝を捧げています。さて、今度は、ビルジッタと全ての聖人たちが模範と仰いだ聖マリアに目をむけ

は、文化、経済、政治、そして教会関係などあらゆる分野において、可能なかぎり女性の活躍のための場が確保されるよう努める必要があります。そうしてこそ、人間社会は男性・女性双方に固有の賜によって豊かになるのですから。

女性の役割が、家庭の中のみならず広く社会のあらゆる活動分野でますます認められつつあるのは「一時のしるし」です。女性の貢献がなかったら、社会は活気を失い、文化は衰え、平和は脅かされるでしょう。女性が持てる可能性を開花させたい、豊かな賜を提供することが

もちろん、母親として最も神経を使う大変な時期に家庭の外で働く場合、母親業という重大な務めに配慮しなければなりません。しかしそれ以外の場合



時に始まる世界との最初の対話を助けるのは母の役目です。誰であれ人間の歩みはここから始まります。私たちの誰もが、過去をさかのほれば唯一の明白な生命の計画に従って母の胎内で存在し始めた瞬間に行き着くのです。母親の「中」にいながら母とは別人、母親の身体と愛を必要としながらも自分自身の完全な自律性を備えて。

女性には胎内で育つ子供のために最善を尽くすよう求められています。それはまさに自らを「贈り物」として差し出すことであり、こうして女性は自分をよりよく知り、女性として完成された者となります。これはまさしく贈り物の交換です。子供のすこやかな成長にとって母子の相互授与がうまく行くかどうかは、決定的な要因となります。

聖母マリア……本日はカルメルの聖母の名で呼びかけますが、神の永遠の御子を生む使命を受け、これらのことを全て経験されました。聖母において母性への召し出しは最高の尊厳と可能性を備えています。

祝された処女の助けによって、女性たちが自らの使命をより深く悟り、社会全体に働きかけて、母親たちへの感謝と親愛をあらゆる形で表わすことができますように。(七・十六)

## 女性は大偉大な教育者

去る5月26日、私は北京女性会議の事務総長当てに書いた手紙の中で、社会における女性の役割を再評価するためには、もっと偏りのない見方で歴史を書き直すことが望ましいと述べました。残念ながら、書かれた歴史はある意味で特殊なこと、人目を引く出来事に注目し、日々の生活をなおざりにしてきたきらいがあります。その結果もっぱら男性の業績のみを語る歴史ばかりが残されたのです。これは改めるべきです。「社会や文化の発展において、あらゆる分野でいかに男性は女性に多くを負っているか、声を大にして言わなければなりません。」(オックスセルバトール・ロマーノ紙、95年3月31日) このギャップを埋めることを願いつつ、教会を代表して語りしたいと思います。人間生活のあらゆる面で多岐にわたる膨大でしかも語られることのない女性たちの貢献に、賛辞を捧げたいと思います。

特に今日は、教師としての女性について考えてみるつもりです。学校制度が整った国々で女

性教師の数が着実に増えているのはとても勇気づけられる事実です。もちろん、女性が教育に深く関わるようになれば、教育課程そのものに質的な革新が期待できます。教育というものが無味乾燥な概念の習得に終わるのではなく、人間としてあらゆる次元での成熟を目指すものであると考えるなら、これは十分根拠のある期待です。それには「女性の才能」が重要であるこ

とは間違いありません。家庭内での最初の教育においても、それは不可欠です。女性の与える「教育効果」は、すでに子供が母の胎内にいる時から始まっています。

しかし、子供の形成過程の後半においても、女性の役割は同じく重要です。女性は人を個人として見るという独自の能力を持ち、その希望や要望を特殊な洞察力で察知することができ、困難に立ち向かい、身を捧げることが出来ます。健全な教育に備わらべき普遍的な価値は、女性と男性の感受性が補足し合う形で提供されます。従って、男性と女性が研修プロジェ

クトや施設で共に働けば、教育課程全般にわたって有益な結果が得られるでしょう。

聖なる処女よ、教育分野での女性の使命が再発見されるようお導きください。聖母マリアは、神である御子と他に類のない関係をお持ちでした。一方では従順な弟子であり、御子の言葉を心中深く思い巡らせていました。したが、他方、母・教師として「神と人との前に、その知恵も背丈も寵愛もますます増して行かれる」御子の人間としての成長を助けました。教育の分野で働く男女、人類の未来を担う男女が、マリアに目を向けんことを！(七・三〇)

## 信徒の使命はこの世に

### 教会シリーズ 27

1 教会メンバーのうち、信徒と聖職者・修道者を区別して、第二バチカン公会議では在俗性が信徒の固有の特徴であるとしていることは周知の通りです。「信徒に固有の特質は在俗性である。」(教会憲章31番) 全員に共通の洗礼による聖別を基礎として、叙階と司祭

的役務が聖職者の身分の特徴であり、福音的勧告が修道者の身分の特徴であるように、在俗性が信徒の召命と使命の特徴であるということなのです。

2 キリストの神秘体の一員として、神の養子として、自分の本分に応じて「働く」ことは全キリスト者共通の

召命ですが、それはさらに特定の召命へと分かれていきます。公会議によれば、叙階された人は、人類のためにキリストにおいて真理と生命と愛という霊的善を獲得するために、神に一生を捧げ、特別の方法で聖なる奉仕を行うように招かれています。(前掲書) また、修道者はその身分をもって、神の王国のためにはかない楽しみを捨てて「唯一必要なこと」を追求する証人、すなわち天国の証人となるよう招かれています。他方、信徒は現世の仕事に従事し、社会の発展のために共に働



# 不変の教え

くことよって神に栄光を帰すよう招かれているのです。公会議が教会の中の信徒の特質をこのように述べているのは、在俗、つまりこの世を尊重していることを示すと同時に、信徒の召命が現世的な見方とこの世の事物を超越することを明示しています。

この世は本質的に  
悪いものではない

**3** 第二バチカン公会議が教えるように、信徒である信者はキリスト者として真の召命を受けています。それは、つねに信徒として固有のニュアンスを備えています。神の国への召命であること、かわりはありません。信徒は「この世」に生きる人です。個人として、また家族や社会のレベルで自らの必要を満たすため現世の事柄に携わり、可能性と能力の及ぶ限り、他の人々と共に働き、社会全体の経済的・文化的発展に尽くします。自分も社会の生きた一員であり、責任あるメンバーだと感じているからです。キリストは信徒のこのような歩みの中で招き、助けてくださり、教会はその歩みを認め尊重します。信徒はこの世にいるという事実から、現世で「神の王国を求め」、現世を神の計画に従っ

て「方向づけ」なければなりません。公会議はこう述べています。召命は、「信徒に固有の現世的な働きに従事し、それらを神に従って秩序づけながら、神の国を追求することである。」(教会憲章31番) これは一七八七年のシノドスでも再確認されました。(提案4、「信徒の召命と使命」15番、「カトリック教会のカテキズム」188) 公会議はさらに詳しく述べています。「信徒は世俗の中に生きています。すなわち、世間のそれぞれのあるゆる務めと仕事に携わり、家庭と社会の一般的生活条件の中で生活するのであって、彼らの生活はいわばそれらによって織りなされている。」(教会憲章、31番) 一読してわかるように、福音の精神に忠実な教会は、この世が本質的に悪であり、手が付けられないものであるとは考えません。むしろ、十字架の救いの力にあずかり得るものと考えます。

**4** 信徒の召命及びその身分と使命の在俗的な特徴は、教会と「世」との関係、教会の下す審判、救いについての真にキリスト教的なアプローチといった、福音宣教の基本的なポイントになります。ヨハネの福音書には、光を認めなかった世(1・10)、父を知らない世(17・25)、真理の霊を知らない世(14・17)、キリストとその弟子を憎む世(7・7、15・18・19)、イエズスはこの世のために祈ることを拒否された(12・31)、イエズスご自身がこの世のものではないのと同様に、弟子たちもこの世のものではない(17・14、16・8・23)などと「世」が神と福音に對立するものとしてたびたび記されていることは無視できません。鋭い対立関係は、ヨハネの第一の手紙の一節「私たちが神から出た者であり、世が全て悪者の配下にあることも私たちは知っています」(15・19)にも表わされています。

しかしながら、ヨハネの福音書の「世」の概念には、救いのメッセージの対象となる人間の世界全体の意味も含まれていることを忘れてはなりません。「神は御独り子を与えたもうほごこの世を愛された。それは、彼を信じる人々がみな滅びることなく永遠の命を受けるためである。」(3・16) 罪が支配するこの世でも、神が愛し給うならば託身と贖いを通して新しい価値を受け、愛されるに足るものとなります。それは救われべき世界なのです。「神がみ子を世に送られたのは、世を裁くためではなく世を救うためである。」(3・17)

**5** 救い主イエズスのこの世への愛と慈悲が示されている場面も福音のここかしこに見出すことができます。「世に命を与える」天から下ったパン。(ヨハネ6・51) 聖体において、キリストの肉が「世の命のためにわたされた。」(同) この世はキリストを通して神の命を受けた。真にキリストは「世の光」であり、世はこの光を受けた。(8・12、9・5) 弟子たちも「世の光」(マテオ5・14)と呼ばれ、イエズスと同じように「この世に」(ヨハネ17・18)送られた、など。この世は福音宣教と悔い改めの舞台です。罪の力に支配されてはいますが、贖いも働いており、信者は一種の緊張状態を経験します。それも最後には十字架の勝利に終わるので、勝利のしるしは復活の日以来、この世に示されました。

**6** 信徒は、この世を避けることなく、それを聖化するよう招かれています。このカテケジスを終えるにあたって公会議の美しい一節を引用したいと思えます。信徒は「そこに神から招かれたのであり、自分の務めを果たしながら、福音の精神に導かれて、世の聖化のために、あたかもパン種のように内部から働きかけ、こうして信仰、希望、愛の輝きをもって、特に自分の生活のあかしを通して、キリストを他の人々に現わすよう召されている。」(教会憲章31番) (一九九三・一一・三)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料七百元 干部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 01130-8-72393